

第 6 期 第 5 期以降も続く課題(噴火後 1 年以降)

6-1. 噴火活動の終息

1. 噴火活動の「終息宣言」

01. 2001 年 5 月 28 日に、火山噴火予知連絡会がマグマ活動の終息を発表し、同有珠山部会が廃止された。

2001 年(平成 13 年)5 月 28 日、噴火予知連は西山西麓・金比羅山の両火口群付近では注意が必要としながらも、「2000 年 3 月に始まったマグマの活動は終息した」と発表した。この発表に伴い、2000 年 7 月までに 36 回開催された有珠山部会は同日廃止された。
[『2000 年有珠山噴火災害・復興記録』北海道(2003/3),p.9]

02. 2001 年 10 月 9 日に、気象庁が有珠山活動の終息を発表した。

気象庁は 9 日、有珠山の噴火活動が 9 月中旬で終息したようだと発表した。有珠山は昨年 3 月 31 日に噴火。火山噴火予知連絡会は今年 5 月末、「マグマの活動は終息した」との見解を出している。

同庁の観測によると、9 月 18 日の調査で、最も活発だった金比羅山火口群 B 火口の噴石放出は止まっており、火山性微動も 13 日以来観測されていない。西山西麓(ろく)火口群も活動が収まっている。

気象庁は「もう少し様子を見なければ断定はできないが、現象からは終息したと思われる」としている。[『毎日新聞』(2001/10/10 北海道朝刊)]

03. 2001 年 12 月 29 日に、金比羅山火口群の KB 火口の噴気活動が停止した。

2000 年有珠山噴火で虻田町洞爺湖温泉町に誕生した金比羅山周辺の KB 火口(愛称・珠ちゃん)の噴気が、このところ止まっているようだ と温泉街の話題になっている。

地元観光関係者によると、これまでは弱い噴気が上がっていたものの、今月 24 日ごろから何も出ていないようだという。明治の噴火では、噴煙が止まってから温泉が発見された経緯があり「外へ水蒸気が上がらなくなると温泉の温度が上がる」「湯量が増える」といった説がささやかれている。

一方、同町月浦に設置したテレビカメラで観測している札幌管区気象台は「28 日は天候の関係で確認できなかったが、27 日には噴気を確認している」とし、湯だまり状態の火口底から立ち上る水蒸気が、強風で吹き飛ばされているのではないかと推測している。[『室蘭民報』(2001/12/29 朝刊)]

04. 2000 年有珠山噴火に関する火山観測情報の定期的な発表は、2001 年 10 月 25 日の「火山観測情報 第 32 号」で終了した。

火山観測情報 第 32 号 平成 13 年 10 月 25 日 14 時 30 分 室蘭地方気象台発表

火山名 有珠山

1. 概況

2000 年噴火によるマグマの活動はすでに終息しましたが、熱的活動は継続しています。

金比羅山火口群(K-B)では、噴石等の放出は停止した状態が続いていますが、熱的活動に伴う噴石等の放出する可能性も考えられますので、火口付近では引き続き注意して下さい。

2. 最近の火山活動経過(9 月 27 日)

金比羅山火口群では、K-A 火口および K-B 火口から最大で高さ 200～500 メートルの白色噴煙が連続的に噴出しています。

K-B 火口は 8 月下旬頃から火口内が次第に湯溜まりに変わり、9 月中旬には全面湯溜まりとなりました。現在も湯溜まりの状態が続いており、火口底中央部では熱水が湧出していますが、水位等に大きな変化はありません。噴石等の放出は停止した状態が続いています。また、噴出活動に伴う火山性微動や空震も 9 月中旬以降観測されていません。

K-A 火口も湯溜まりの状態が続いていますが、水位等に大きな変化はありません。

西山西麓火口群では、N-B 火口から最大で高さ 100～300 メートルの弱い白色噴煙が連続的に噴出しています。火口群周辺の熱的活動は現在も続いています、大きな変化はありません。

この期間、有珠山に発生した火山性地震は 20 回と少ない状態が続いており、2000 年噴火前と同様な回数レベルで推移しています。有珠山を震源とする震度 1 以上の地震は、昨年 8 月 13 日以来観測されていません。

火山観測情報の定期的な発表は第 32 号をもって終了します。今後は、火山活動に変化が認められた場合には、火山観測情報等で随時お知らせ致します。

[『火山観測情報 第 32 号』室蘭地方気象台(2001/10/25 14:30 発表)]

2. 全避難指示の解除

01. 2001 年 6 月 20 日に、泉地区の一部及び洞爺湖温泉地区の一部に対する避難指示が解除された。

虻田町の長崎良夫町長は 19 日、有珠山噴火で同町洞爺湖温泉地区、泉地区の各一部に出されていた避難指示を 20 日午前 9 時に解除すると発表した。対象は 202 世帯、378 人。昨年 3 月末の噴火以来初めて、全世帯の避難指示が解除される。

突発的爆発が見られる金比羅山の KB 火口から半径 200 メートル以内の非居住地域については避難指示を継続する。

20 日午前 9 時に解除される洞爺湖温泉西側地区と泉地区は、噴石などで住宅が壊れ、道路も傷んでいるため、住民の帰宅は難しい状態。泥流の危険性もあり、砂防事業など

の災害対策が必要なため、当面は住民らが前日までに届けた場合を除いて規制を続ける。
[『室蘭民報』(2001/6/20 朝刊)]

02. 2001年6月20日に、虻田町が有珠山立入り禁止を一部解除した。

長崎町長は、泉北地区で散策路用の木道を整備している新山や沼の周辺の立ち入り規制については「木道整備の完了を待って、なるべく早い段階で規制を緩和したい」と述べ、日中に限り観光客らを受け入れる考えを明らかにした。[『室蘭民報』(2001/6/20 朝刊)]

03. 2002年3月31日に、すべての区域の避難指示が解除された。

胆振管内虻田町は3月末までに、一昨年噴火した有珠山周辺の避難指示を全面的に解除する方針を5日までに固めた。対象地域は金比羅山B火口の周辺半径200メートル以内。

火山予知連絡会が1日、有珠山の火山活動が終息していることなどを報告したのを受けて決めた。対象地域に家屋はなく、立ち入りの制限は続けられる。[『毎日新聞』(2000/2/6 地方版)]

3. 災害対策本部の廃止

01. 2001年6月28日に、政府の有珠山噴火非常災害対策本部が廃止された。

平成13年5月28日、火山噴火予知連絡会は「マグマ活動は終息」と判断を行うとともに、6月20日には、非居住区域の一部を除き避難指示が解除され避難指示対象世帯が解消された。一方で、同年3月には道が復興計画基本方針を策定、6月23日にはタウンミーティングが被災地虻田町で開催されるなど、復興に向けた機運が盛り上がっている状況に鑑み、政府として復旧・復興に向けた取り組みを一層支援するため、防災担当大臣を議長とし、関係省庁の局長級で構成される「有珠山噴火災害復旧・復興対策会議」を平成13年6月28日付けで設置した。(平成13年9月3日、有珠山噴火災害対策本部)。これにともない、地方公共団体とも調整の上、同日付けで「有珠山噴火非常災害対策本部(平成12年3月31日設置)」は廃止とし、復興に向けた対策は新組織に引き継がれることとなった。[『有珠山噴火災害・復興記録』北海道(2003/3),p.127]

政府は28日、北海道・有珠山の噴火非常災害対策本部を廃止するとともに、同日付で有珠山噴火災害復旧・復興対策会議を設置した。5月28日の火山噴火予知連絡会の終息宣言を受け、20日には避難指示の対象世帯も解消されたため。[『毎日新聞』(2001/6/29 朝刊)]

02. 2002年3月31日に、有珠山火山活動北海道災害対策本部を始めとする各種機関が廃止された。

その後、有珠山の噴火からほぼ2年を経過し、マグマ活動の終息、住民避難、砂防工事

等の対策にめどがついたことから、平成14年3月31日9時00分に災害対策本部及び災害対策地方本部を廃止した。[『有珠山噴火災害・復興記録』北海道(2003/3),p.19]

有珠山噴火の際に設置された、災害対策本部については、国は平成13年(2001年)6月28日に廃止し、同復旧・復興対策会議を設置、道及び伊達市、虻田町、壮瞥町の災害対策本部についても、平成14年(2002年)3月末で廃止し、それぞれ復興に向け、新組織に対策を引き継ぐこととなった。[『有珠山周辺防災まちづくり計画』北海道、伊達市、虻田町、壮瞥町(2002/6),p.2]

03. 2003年3月5日に、北海道議会有珠山噴火災害対策本部が廃止された。

有珠山の噴火に伴い、北海道議会では、平成12年4月4日に「北海道議会有珠山噴火災害対策本部」を設置し、4月5日には現地で災害対策の状況を調査するとともに、避難住民への激励を行った。

(中略)

火山活動の被災に対し、防災施設などの整備をはじめとする復旧・復興対策は所要の措置等が講じられたことから、平成15年3月5日をもって調査を終了した。[『2000年有珠山噴火災害・復興記録』北海道(2003/3),p.229]

4. 応急仮設住宅の廃止

01. 噴火後約1年を経過した時点でも、約1300人の住民が仮設住宅での暮らしを余儀なくされていた。

[『2000年有珠山噴火災害・復興記録』北海道(2003/3),p.102]によれば、噴火後約1年を経過した2001年3月22日時点での応急仮設住宅の入居者数は、1,349人(606世帯)となっている。

02. 応急仮設住宅からの退去は、2001年11月頃までは緩慢なペースだったが、2001年12月～2002年4月の間に一気に退去が進んだ。

応急仮設住宅には、5月5日の壮瞥町滝之町地区の60戸をはじめとして、完成した住居から順次入居されることとなった。そして、噴火から約4か月後にあたる8月1日に、最大の入居者数である1,622人の入居を記録した。

その後の退去については非常に緩慢なペースであり、入居率にして約95%から70%までの25%を下げるまでに1年3か月程の期間を要している。

しかし、その後の平成13年12月から翌年14年の4月までの間の退去は著しく、平成13年11月の入居率71.7%から約6か月後の翌年4月末には3%まで減じている。[『2000年有珠山噴火災害・復興記録』北海道(2003/3),p.102]

03. 2002年7月8日、全被災者の仮設住宅からの退去が決定した。

[『2000年有珠山噴火災害・復興記録』北海道(2003/3),p.103]によれば、2002年7月8日に、応急仮設住宅の入居者全員の退去が決定した。